

## 4. 当院に依頼された三歳児健診例の診断と治療の結果

川城 信子\* 古賀慶次郎\*

### 1. はじめに

東京都では平成2年7月から三歳児健診を開始した。アンケート、ささやき声による聴き取り検査、指こすり音聴き取り検査を家庭でおこなった結果で、保健所で要精密検査と判断された症例が、国立小児病院耳鼻咽喉科に依頼された。これらの症例についての検査と診断結果について報告する。

### 2. 対 象

保健所の健診で要精密検査とされ、国立小児病院を受診したのは75例であった。この75例の検査の結果と診断、経過について報告する。

### 3. 結 果

平成2年8月から平成6年1月の約3年半の間に受診したのは75例であった。男子43例、女子32例であった。受診年度による症例数は

平成2年	10例
平成3年	8例
平成4年	23例
平成5年	33例
平成6年	1例

1) 受診時の主訴と診断は次のようである。  
難聴の疑いで受診した48例の結果

滲出性中耳炎 17例

高度難聴	1例
中等度難聴	1例
左高度感音難聴	1例
左副耳, 外耳道閉鎖	1例
構音障害	2例
言語の遅れ	2例
異常なし	23例
滲出性中耳炎の疑い	4例
滲出性中耳炎	4例
言葉の遅れ	16例
言語発達遅滞	14例
異常なし	1例
左高度感音性難聴	1例
TGの形が悪い	1例
異常なし	1例
耳介形態異常	1例
右小耳症	1例
舌小帯が短い	3例
舌小帯短小症	3例
いびき	2例
咽頭口蓋扁桃肥大	1例
75例の診断は高度難聴	1例
中等度難聴	1例
左高度感音性難聴	2例
滲出性中耳炎	21例
小耳症, 外耳道閉鎖症	2例

\*国立小児病院耳鼻咽喉科

言語発達遅滞	16例
構音障害	2例
舌小帯短小症	3例
咽頭口蓋扁桃肥大	2例
異常なし	25例

であった。

## 2) 検査内容について

tympanometry を施行したのは75例中例, 38例76耳であった。

その中A型を示したのは31耳

C型を示したのは18耳

B型を示したのは27耳であった。

標準聴力検査は16例, 遊戯聴力検査2例, peep show 20例, COR 18例と計56例に聴力検査を施行した。左右別の聴力検査を施行し得たのは18例であった。peep show の条件付けが困難でCORを施行したのは18例であった。

ABRを施行したのは12例であった。その中両側高度感音難聴1例, 中等度難聴1例, 一側難聴2例が診断された。他の症例は言語の遅れのために来院した症例で, CORの閾値上昇があるために施行した。

## 3) 治療について

高度難聴, 中等度難聴に対しては補聴器を装用の上, 就学前の訓練施設を紹介し, 訓練を開始した。

一側難聴についてはよく説明し, 経過観察のみとし, 1年に1度は定期的に聴力検査を施行するようにした。

滲出性中耳炎21例にたいしては外来にて投薬や鼓膜切開を施行した。アデノイド扁桃肥大を合併しており, 咽頭口蓋扁桃摘出術を施行したのは3例であった。2例は上気道狭窄症状を随伴していた。口蓋裂, 副鼻腔炎が合併していた

のが1例であった。この症例は他病院にて口蓋裂の手術予定である。tubing 予定の症例が2例ある。

言語発達遅滞の症例については言語治療外来にて指導を開始した。すでに言語について他施設にて指導を受けている症例4例についてはそのまま指導を続けるようにした。

構音障害の症例は言語治療の面から指導開始した。

舌小帯短小症3例のうち1例は構音障害があり, 手術を施行した。

口蓋扁桃肥大2例は上気道狭窄症状を伴った1例は手術を施行した。

## 4. 考 察

アンケートによる既往, 指こすり音聴き取り, ささやき声聴き取り検査をチェックする方法で異常が疑われ, 国立小児病院耳鼻咽喉科を受診した75例中異常なしが25例であった。健診によって高度難聴1例, 中等度難聴1例, 一側難聴2例が発見された。今回の症例では言語発達の遅れを主訴に依頼を受けた症例が16例と多かった。聴力のチェックもしておく必要があり, その中に一側難聴が発見された。言語発達の遅れで来院する症例について聴力検査をする場合, 全体的な遅れがあるために標準聴力検査は施行が困難であった。peep show やCORでやっと検査が可能であった。最終的にはABRによる診断も必要であった。うけいれ側の施設設備の問題と人の問題が生じてくる。受診する側の地理的問題もある。3歳児を検査し, また治療できる充実した施設と人の確保が望まれる。

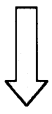
## 5. ま と め

1) 精密検査のために受診した75例の結果は、高度難聴1例、中等度難聴1例、一側難聴2例、小耳症、外耳道閉鎖2例、滲出性中耳炎21例、言語発達遅滞16例、構音障害2例、アデノイド口蓋扁桃肥大2例、舌小帯短小症3例、異常なし25例であった。手術を要したのはアデノイド扁桃摘出手術4例、舌小帯短小症1例であった。今回は言葉の遅れを主訴に来院した症例が増加したのが特徴であった。

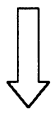
2) 三歳児健診は現在のシステム(アンケート、指こすり、ささやき声による聴き取り診検査)で難聴のスクリーニングとしての役割を十分に果たし得る。

3) 聴力検査は標準聴力検査16例、遊戯聴力検査2例、peep show 20例、COR 18例、ABRを12例に施行した。標準聴力検査可能であったのは56例中16例と約3分の1であった。

4) 要精密検査となった3歳児の精密検査と治療が施行できる設備と人の確保が望まれる。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



#### 1. はじめに

東京都では平成 2 年 7 月から三歳児健診を開始した。アンケート, ささやき声による聴き取り検査, 指こすり音聴き取り検査を家庭でおこなった結果で, 保健所で要精密検査と判断された症例が, 国立小児病院耳鼻咽喉科に依頼された。これらの症例についての検査と診断結果について報告する。